



短歌集 追憶



小林 道憲

〔短歌集 追憶〕

小林 道憲

旅

梨の花の香り漂う街並はいつかの旅の思い出なりき



瀬戸内の赤き入日に消ゆるごと　いか釣る舟のちさき影み
ゆ

船旅の夏の夜も更け　瀬戸内の小さき島の灯り恋しき

日落ちて空なお紅あかき玄海の沖波遠く船影の見ゆ

薄紅きブーゲンビリアの花かざし 海辺に集う乙女子らの
夏

生い茂る椰子の葉陰に牛集う 南の果ての島の昼すぎ

大和路



春風が若芽育む大和路の若草山の野火の焼きあと

高宮に急ぎ急ぎてふりむけば 耳成 畝傍 香具山のみゆ

斑鳩いにしえみちの古道の野の花に 朱き入日の染み入りにけり

葛城の秋の古道こじろに日も暮れて 一言主やしろの社やしろに着けり

大和路の風もひとしお身にしみて 暮るるを急ぐ山の辺の
道

華やかな飛鳥あすかの面影今はなく 沼に葦のみ生い茂りつつ

いにしへの大王おおきみの功いさお大いなり 御陵みまご今は木々に覆わる

京
都



北嵯峨の山々遠く 春風や 野をゆく乙女の髪なびく見ゆ

鴨川の柳ななめになびきたり 路行く女ひとの裾も乱れて

岡崎の池の水面の波払う枝垂れ柳に春雨の降る

明け方の鐘ひびきたる京の街 まばらな雨の通り過ぎゆく

南から北へとのぼる淀川の舟と競いぬ 桜前線

水上は桜散るらし 白川に花びら惑い流れゆくかな

緑なす樹々に朱色の柱映え 鳥啼きしきる上加茂の杜

様々のこと思い出す龍安寺 白砂の海 波寄せる岩

保津川の早瀬のごとく休まざる流れの末の心なりけり

街中に歌声起こる都路も 東の山に墳墓広がる

人亡くて散りしく落葉の音聞こゆ 日差しこぼれる苔寺の
庭

能〔野宮〕

秋暮れて嵯峨野の道の野の宮の竹の葉風は恨みなりけり

ひととせの想いを返す木枯らしに まねきかかりて 京の
顔見世

まどろみてふと見し夢はいつしかの 冬の夜の雨 下京の
雨

広沢の池

北嵯峨の旅行く人の跡絶えて 池の水面に冬雨の降る

春



春立つといえどもいまだ消えがたき雪の下なる土のぬくも
り

朝日さし眩まはゆき光きらめきぬ 若芽凍こごえる春の降おり霜

オオイヌノフグリ

星の瞳 咲きし小道はまだ寒く 蜂はちさえ気づかぬ春の訪れ

星の瞳 透き通る青 急ぐ小径、 雪残る山 そよぐ南風

春浅き道の辺に咲く葶草　しかし短き花の営み

柴犬のわれを抜き去り振り返る　日差しまばゆい春の道の
辺

暁の紅くれない色の木瓜ぼけ重し　夜明け近くの村雨に濡れ

来し方は一夜の夢に過ぎ去りて　窓辺を濡らす春の村雨

春の気も昨夜の雨に潤いぬ　銀座の柳青々として

病い得て乾いて艶のない爪に 子猫戯むる春のつれづれ

巡りゆきてめでし桜の面影のまぶたに乱れ 寝ねがたかり
き

能「熊野」

館やかたには愁いに沈む女ひとありて 都はいまや花盛りなり

両岸りょうぎしに桜並木は連なりぬ 逆さの影のさざ波に揺れ

つぎつぎと春は巡りて花は咲く 愁いの人を知ることもな
く

能「西行桜」

埋れ木の人知れぬ身となりぬれど 頃待ち得たる桜花かな

能「山姥」

足引きの山巡りする山姥が咲くかと待ちし山つつじかな

あの頃を忘れて日々を経しものを また思い初む春の陽だ
まり

旅人よ 在りし日のこと聞くなかれ 変らぬものは花のみ
にして

わが宿の宵は静かに逝く春の 花落ち 人のふいに恋しき

枝先に黄緑色の芽を吹きし葉よりも早き花の散りぎわ

夜半になり雨降り初めぬ春の宵 かすかに聞こゆ 窓を打
つ音

わが庭も昨夜の雨に潤いて 岩間の水の流れゆく音

小夜嵐 急^せかるることく吹きすさぶ 長かりし時を生きて
来しかな

われを知る遠き都の友もなし 野辺の若草^{いづ}萌え出れども

ふるさとにとどまるべきや出ずべきや 川面^{かわも}の雁も飛び立

ちし後のち

在りし日を思い起こせば恨みあり 雨に杏あんずの花の咲くころ

昔日の春の姿は今はなし 古城の跡に野の花の咲く

ち
とてもはや昔に帰る時はなし 花老いぬべし 雨過ぎての

別れ来し跡の恨みはいつまでも 形見の花の色に残れり

豊なわる春の山々越えくれば 祭り近づく村々の見ゆ

初夏



しらじらと夜は明け初めぬ 播州の野に郭公かっこうの啼き渡りた
り

峠より開けし平野眺めれば 二筋の川 光輝く

能「項羽」

つわものの激しき瞋いかり鎮いままらず 荒れたる野辺にひなげし
の咲く

山鳥は木の間隠れに語りたり 移る陽射しものびやかにし
て

春楡が昨夜の雨に輝きて 木の間を移る椋の一群

わが村も一夜の雨に潤いて 木の中の蔭に時鳥ほととぎすの啼く

雌メが飛び 雄オスが後追う 木のこずえ 若葉の森に時鳥ほととぎすの啼
く

新緑のあけぼの杉に朝日差し 鳥の語らい和むひととき

風もなく樹々の緑の目に滲みて 鳥の声のみ響き渡りぬ

山深み苔むす岩の照らされて 人の声のみ響き渡りぬ

木のこずえ歩むにも似て人渡る 若葉まばゆい山のつり橋

水際の岩照らされて朝日さし 谷間の川の魚さかなきらめく

目にしみるみどり湖水に映りたり 水面みずもに山のあるごとく
して

野辺に咲く昼顔の花笑い出て 五月さつきのうちに夏は来にけり

木苺の赤き実なりて風よどむ 鳥の子育て終えしこのごろ

いにしへの栄華は今は夢なりき 滅びし城に昼顔の咲く

歩み来し野の道遠く 歩一歩 踏みしめ確かむ草の感触

梅
雨



ひとり咲く紫陽花の微笑^えみ愛^めでながら 病^{やまい}養う長雨の日々

蓮の葉の指よりちさき青蛙 池を渡りし技の巧みさ

青蛙 跳ねて時折戸こに入りぬ 日連ね雨の降りつづくころ

青蛙 窓に這いつき 虫を追う ものみな湿る梅雨冷えの
夜

啼く蛙 水満ちる田 湿る風 映るともしび 揺らぐ家陰

トカゲ

恐竜の生き残りもあわれなり サツキのもとに急ぎ隠れし

雨に濡れ泣けるがごとき夏つばき　こころも湿る梅雨冷え
のころ

雨やんで　雨だれの音しきりなり　軒端の隅の夏つばきの
花

鳥啼かず　人も語らず　蒸し暑き風さえ止まる梅雨時のこ
と

わだかまり解けるがごとく　梅雨空に　静かに開く花菖蒲
の花

紅くれないの石榴ざくろの花の目にしみて　長雨休む梅雨のひとつき

こころみにさびしき愁い人問わば 梅の実うるるころの雨
降り

雷雨止み人もまばらに出できたり 梅雨明け近き朝の街角

盛
夏



七夕の願いの短冊 竹にさげ 今宵夢みる吾娘みこの寝姿

生れし世に時の流れを紡ぐこと 蚕の繭をつくる営み

そばの芽のひと雨ごとに伸びてゆく 茎の赤きも日々深か
まりて

椋鳥が朝の食事に群れ集う 昨夜以来の雨も上がりて

億劫の時の流れを宿しつつ ふと現われし薔薇の造形

アラビアの文字にも似たる形して 土用のうなぎ桶に踊れ
り

空蒼く 日差しまばゆい夏の日の葵の花の紅の色

奥山の村の水車の音やまず 谷に風吹く夏の昼過ぎ

奥山に ノリツケホーセと小鳩鳴く 故郷の村の夏の昼過ぎ

大岩の中からしぶきはとばしり 虹立つ滝に風巻き起こる

石馬のみ夏草せきはに隠れ遺りのこたり 荒れたる城の石垣の隅

生い繁る椰子の葉影の砂に浮かび ともしびともる島の夕暮れ

われひとり佇む影の砂に落ち 灯火揺れる夏の夜の海

わが胸をゆすどよめき 夏の日の海辺の波に寄せる恋しさ

白いハイビスカス

うれしきは 昔好みし歌い手の耳もと飾りし花の咲く日々

眼を凝らし耳に聞こえぬ音を聴く 沖の巖にくだけ散る波

懐かしき村人も皆みまかりき 故郷の森の木の葉さやぎぬ

蛇行して流れる川はよどみなし 静まりかえる夏の村々

夏の日の夕昏時の雲染めて 遠^{とお}雷^{かみなり}の低く聞こえり

読みさしの本を片手に 窓の辺^へでまどろむうちに通り雨の
過ぐ

この夏は災い多く人も逝く 村の林に法師蟬の鳴く

望まらずも死は訪れむ 夏の日の木陰のもとの蟬の亡き骸

目を閉じて夕暮れの蟬に聞き入りぬ 過ぎにし日々は帰る
ことなく

齡老し耳の底に残りたり 帰りしのちの孫の足音

黙禱の一分間の長さかな 七十年の道を思いて

悔い多き戦さ終わりし夏の日の夕暮れ時の蜘蛛の営み

破られし網あみ忙しく直しけり 暮れゆく夏の蜘蛛の行ない

明日ははや秋風立たむ 軒の辺に巢作り急ぐ蜘蛛の振舞い

人知れずぶらんこのみ動きたり 遊びし子等のさざめきし

のち

秋



この丘は奥津城なりき
今はただ耕し尽くし
棚田つらなる

ふくみ玉ふくみて散りし
数々の過ぎし想いに
夕べ降る星

影を抱いてまた立ち帰る神無月 香りも白し木犀の花

眠られぬ秋の夜長をそぞろ歩く 木犀の香り漂える中

庭先に桐の葉落ちて霧深し 秋立つ夢も覚めやらぬうち

桐の葉の欠けたるところに星ありて 眠れぬ夜半をひとり
過ぎしつ

能「井筒」

秋の野に一むらすき穂に出でて いくとせ経ぬる名残な
るらむ

落日の雲を浮かべて流れゆく川の水面みなもに光きらめく

良寛和尚

僧ひとり笠を荷にないて帰りけり 夕日の道に鐘の鳴るころ

能「俊寛」

沖つ波 船影絶えて かすかなる声も消え失せ 僧一人あり

涼風すずかぜは日暮れ時から強まりぬ 鐘かねの音ひときわ響き渡りて

吊るされし朱色の柿のはざまより もみじし山の見えし

一瞬ひとしげ

泥の田に鴨舞い降りて 二つ三つ 爪跡残し飛び去りにけり

つぎつぎと親しき人もみまかりぬ 夜半の秋雨降り止まずして

在りし日のことどもすべて夢なりき 落葉の道を時雨過ぎゆく

いずこよりいずこに帰る世なりき 秋の夜長に時雨降りし

仮の世は旅と思えど 恨みなる時雨降る夜は涙のみして

さなきだにもものさびしき夕べかな 銀杏の落ち葉袖に降
りしく

雨過ぎて銀杏の落ち葉路に敷く 思い定めぬ暮れの街角

夜更けより降り続く雨やまずして 在りし日のこと胸迫り
くる

夜目覚め坐りて辿るくさぐさの思い出巡る眠られぬ日々

史かみもみな読みも飽いたり 小夜更けて 灯火ともしび一つともるひ
とつ家や

人はみなひとところに帰りけり 故郷の森に梟の鳴く

石壁にまつわる葛つたに戯れし月はや中洲の葦を照せり

伊勢神宮式年遷宮遷御の儀

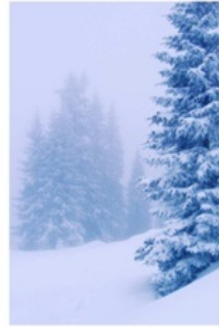
さくさくと杳くの音のみ響きたり 神遷うつるらし闇の静けさ

しみじみと冷めた紅茶飲みほしぬ 別れの朝の立ち込める
霧

満点星どうだんの目にしむもみじ霜帯びぬ 春の梅より紅くれないにして

人知れぬ恨み湧き出ず 平家枇杷 掻き鳴らす音の止みし
ひととき

冬



冬枯れて今日もまもなく暮れてゆく 枝に残りしもみじ葉
の色

不器用に生きてきたのを晒しますか 夕暮れ近い冬の街角

冬鴟ふゆがらす 枝にとまりて飛び立ちぬ 風に落ち葉の舞い上るこ

ろ

うつつつとものを思いいて幾いくとせ歳や 窓を震ふるわせ木枯らしの吹
く

かすかなる望みも絶えて 濁り酒 見つめつ木々のざわめ
きを聞く

冬の雲 匂う蠟梅 百舌鳥の声、身罷りし人 心急く暮

降り続く雨にもみぞれまじりたり 蜜柑のみどり黄ばむこ
のころ

日暮れて行き交う車の音絶えて 冬の雨のみ降りしきりたり

いかづち
雷のとどろく音に冬告げて 青菜の上にあられ降りしく

苔むしし巨石の端を這うかずら 躓き多き暮れの山道

つぎつぎと喪中の葉書届きたり 師走半ばの風すさぶ日々

暮れ近く親しき友の死すという 夜中に風のつとに起こり
て

今年また命ありけり 年の瀬の大つごもりの心急せく中

空澄んで富士山系に夕日さす 白と紅くれない半々にして

寒雀夕暮れ時に集まりて囀ささやりてのち 皆飛び立ちぬ

寒き中 西に傾くオリオンの 流れる星を 二人見し夜

この冬は歳老いにけり しみしみと氷張る夜の凍てる静け
さ

若者の襖みせき終えたる紅くれないに染まりし肌みに粉雪の舞う

われよりも若くして死し人ありて 軒端の柚子に雪降りし
きる

街中に降りしく雨は凍てついて 夜更けのうちに雪になり
けり

傘さして雪降る街を急ぎたり 腕に重みを持ち堪えつつ

良寛の五合庵より

奥山に鳥とぶ姿立ち消えて 訪う人なく雪の降り積む

夜更^よけて雪積もるらし 窓辺より時折聞こゆ 竹折れる音

なんとなく胸騒ぎする朝かな 夜半より降りし東京の雪

過ぎし冬 積もりし雪は多かりき 沢の寒風身に迫りきて

日一日陽ざし差し込む窓辺より たわみたる竹の跳ね起き
る音

ひそやかに流れる水は音たてて また静まりぬ 如月の夜

春浅き命を刻む音なれや 雪融け近き軒の玉水

乙女



魂はいづくにありやと問いし君 五尺の小軀の胸のふくら
み

果敢^{はか}なくも悲しきものゆえ 眼底に 乙女の姿しばしとど
めむ

会うことと別れることはひとつなり 霧立つその日会いし
嬢子^{おしめこ}

群青の硝子の酒の清くして　ペルシアの乙女　春風に舞う

鎮魂



その頃はみまかりし児を思い出す　日差しまばゆい十一月
のころ

幼くてみまかりし児を思い出す　十一月の午後の日だまり

われ描きしアキアカネの絵 幼くてみまかりし児の柩に入
れぬ

降りしきるもみじ葉のなか カラコロと みまかりし児の
骨を拾いぬ

生きる日の希なる吾児あこの定めとて あまりに果敢なき命な
りけり

長き夜にふと目覚むれば 去いにし児このわが名を呼びぬ 枕
辺のもと

とことわに波風たたぬ水底の黄泉路よみじに吾児あこは帰りしならむ

埃多き部屋の彫刻や 冬の陽ににぶく光りぬ 吾児は今亡
く

われもいづれ 亡き児のもとに旅立たむ 狭庭の隅の芥子
の一粒

新 生



一心に人形とのみ遊びいし吾娘も児をもつ母となりしか

児こを抱いだく吾娘あこの姿さにいにしへの聖母子像まぼろしのまぼろしを見ぬ

楡えの木みの若葉芽えみを吹き風薫かるなかにほころぶみどり児この
微笑

追憶



春の田たに子腹痛こはらいと鳴なくという

蛙かのわ声こゑを聴ききつ眠ねりき

いとけなきころの思い出 水ぬるむ春の小川の魚うおのうごめ
き

わが村の小道の先に家ありて 青き山々 煙立ち行く

ちさき日の思い出のごと 花火見ゆ ふるさとあたりの遠

き山の端

幼き日の記憶をたどるもどかしさ 花火の音の遠く聞こえ
て

今年また夏の夜空に花火見る 幼きころの日々を思いつ

夏の夜の昴すばるまたたく空仰ぎ 夜回りせし少年のころ

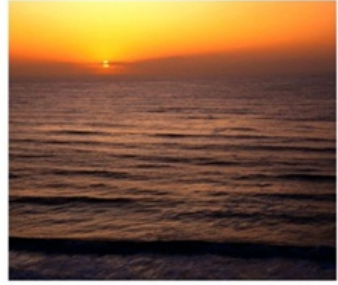
しみじみと思い出すのは 在りし日の故郷の村の去いにし
人々

国のため身を傷つけし軍人いくさびとの車中に物乞う姿ありしか

病臥せし母を思いて 寒風さむかぜの中を急ぎし少年の日々

ラジオから聞こえし歌に涙ぐむ 雪降る街の遠き思い出

人生



か 学び舎^やをいでて戻りしふるさと^{とつくにひと}も 異邦人の住みかなりし

帰りても心を許す友もなし 故郷の道に葛かずら這う

き かすかなる時の優しさ求めつつ かたくなまでの道を歩み

あのかことは 三十年も前のこと ふと思い出す不愉快なこ

と

もうすでに演技は終わりぬ　なのにまだ幕の降りない芝居
のごとし

ぬ　昏みたる世を憤りたる我ゆえに　踏みしだかれし花を思い

つ　夢にだに返らぬものはわが思い　人の恨みに身を焦がしつ

忘れむと思う心の恨みなり　忘れぬよりももの思いなれ

この世にて見し有様のあさましき身の恨みなる修羅の苦しみ

人知れず罪深き身の埋れ木の憂き世の夢の修羅の哀しみ

人の世に作りし罪は消えぬべし 早瀬の中を遊ぶ小魚

世を憂う心はあれど涙のみ 夜更けに雨の音を聞きつつ

歳老いてなお燃やさん命あり 夕昏近き冬の日のこと

老の身も心は常に慌^{あわただ}し 愁いの歳も暮れなむとして

人の代の盛りは短く老いぬべし やがて雷雨の迫りくる暮
れ

世の中を知らぬ迷いのはかなさよ しばし休らう宿もなし
とて

名も成さず 身はすでに老ゆ ふるさとの雪に埋もれて朽
ち果つるもの

あだし身の時の移るもわきまえず われだに憂しと思う老
いの身

薄氷踏む思いにて わが道を いくとせ耐えて生きて来し

かな

補遺

冬の夜の寒さ身に染みふと目覚む 生きてきしこと
悔ゆることあり

母さんが待っているねと孫の言う 帰りの電車の窓
を打つ霰

わが国の独立喜ぶ母ありき 窓辺に陽射し降り注ぐ
ころ

木犀の香り漂う街並みの風さえよどむ秋の長雨

病院の狭き受付せわしけれど 目もとで微笑むマス
クする乙女

施設にて歳老いし母と花火見る 今年限りの思い出
ならむ

融け始む雪間にのぞく青草をついばむ椋めおとの夫婦来る
朝

公園に遊ぶ子たちの声聞きつ 歳老いし身となりし
この春